

## 魔導師の仕事

「〈見えない死〉？」

魔導師ノウアの向かいに座る、髪を一つに編んだ女は、怪訝な顔をした。

ノウアは、いま、自然の村の長おさが定住する、村の管理塔おさにいた。自然の村の管理塔は、木造の立派な平屋だったが、長おさの建物だけ、別棟おさになっていた。

その別棟で、彼女たちは、新たな呪いについて話し合うべく顔を合わせたのだが、自然の長おさクレアナダは、ノウアが予想したよりも、緊迫した顔をしていた。

彼女は、魔導師から来訪の旨の手紙を受けたとき、すでに理解していたのだ。作物を腐らせる呪い、それが自分の村に広がった時、どれほどエイネーが崩落するかを。

エイネーの食料は、狩りの人によるデイゴンネーの狩猟採集業と、自然の人の農業、獣の人の畜産業によって賄われている。そのうちの約半分を支えているのが、自然の村の農業―農作物だ。

エイネーの食糧庫とも呼ばれる自然の村に呪いが広がれば、飢餓が訪れるのは、はっきりと目に見えていた。

〈耕しの者〉たちの間では、すでに話が広がりつつあった。彼らは、原因不明

な呪いの噂に怯えていた。

だが、いま、魔導師はその呪いに名前を与えたのだ。

「〈見えない死〉……。解呪方法は、確立されていないのですね？」

クレアナダ長は、背筋を伸ばし、確認するように訊ねた。

「ええ。ですが、発見はしやすい呪いです。〈見えない死〉は、外見が健康なものと同じですが……」

ノウアは、ヨウスの手紙と共に送られてきた、土とナルウ苺を思い浮かべた。

「作物の中身や、畑の内部が、鉛色の液体に満たされます。それが、あたしたちに悪寒や吐き気をもたらす要因となっているのです」

クレアナダ長は、その形のよい額に、懸念の色を浮かべた。

「どこからやって来たのかは、まだ……？」

「ええ。一昨日の発見ですからね。それに、情報が足りなさすぎます。しかし、長期戦になるのではないかと、あたしは危惧しているんです」

「とうとうと？」

「〈耕しの者〉イエリオットについてです。彼が、もともとの畑の所有者でありましたが、昨年、山犬に襲われて亡くなりましたね？」

「ええ。傷が化膿して亡くなったと聞いております。もっとはやく治療できていれば、救われた命でありますのに……」長は、静かに目を伏せた。

「でも、あたしは、イエリオットが嘘をついているように思えて仕方がないんです」

「え？」

魔導師ノウアは、壁にかかる自然の村の地図を見やった。

「イエリオットの薬草畑は、自然の村北西部、人差し指山地と、青の真中山が交わるあたりニアバルバン谷付近ですが、通常、エイネーの山犬は、もっと北上しなければ会うことはありません。捕食する大型の草食動物が北部にいるからです」

クレアナダ長は、わずかに身を引いた。

「確かに、山犬は北部に生息しておりますが……。でも、確実には言い切れませんよ。彼らは、我々の知りえぬ世界で生きていますから」

言いながら、クレアナダ長は、迷いを滲ませた。

「イエリオットの不審な点は、他にもあります。彼は、〈見えない死〉を、ヨウスよりも早く見つけていたみたいなんです。半年前に」

「半年前!? そんな話、わたくしはなに一つ聞いておりませんよ!」

クレアナダ長は、イエリオットに対する怒りをあらわにした。

「イエリオットは、ヨウスに対しても、詳しくは語らなかつたようです。というより、はぐらかしていた。そこが、あたしには、不自然な気がしてならない」

「〈見えない死〉のことを、イエリオットはもともと知っていて、わたくしたちが知る時機を遅らせたと？」

「そうであつたら、事態はもっと複雑になります。長期戦になりそうだと言つたのは、そういう理由もあつてなのです」

「なるほど……」

長は、黄金色の腕輪を掴んで思索した。いまになって、目の前に茶があつたことを思い出す。けれど、双方手を伸ばさなかつた。

「いまできる最大のことは、もとイエリオットの畑に、だれも近づけさせないことです」クレアナダ長は言つた。

「ええ。ヨウスが燃やしましたが、ただの炎では、〈見えない死〉は解けなかつた。できるかぎり早く解呪方法を作りますが、いつまでにはお約束できません」

ノウアの言葉に、クレアナダ長は神妙に頷いた。彼女の頭には、魔導師不足の懸念があつた。魔法動物被害は、ここのところ増えているし、動ける魔導師は、はっきり言って、魔導師ノウアと魔導師アリアだけなのだ。

（アートゥナ様がもっと力をつけてくださればと思うけれど、こればかりは、影の人にお任せするしかなさそうね）

すると、こつこつと窓を叩く音が聞こえた。

みると、みずぼらしい鳥人形が、窓を嘴で叩いていた。

「ややっ！ まずい、そろそろおいとましくなくては」

ノウアは、がぶがぶお茶を飲むと、貫頭衣を羽織った。

「すまんが、クレアナダ長、あたしはこれから守りの村へ行かなくては。なにかあれば、また手紙を寄こしておくれ」

クレアナダ長は、「ええ」と返事をしたが、すでに魔導師は部屋を出たあとだった。

自然の長は、伸ばしていた背中の力を、わずかに落とした。

魔導師は、足りていない。なぜ魔導師の子は、こうもまれてこないのか。それは、クレアナダ長だけにかかわらず、エイネー全土が抱える疑問だった。

守りの村へ着いたノウアは、育ての丘の、裏の森へ案内された。

依頼人は守りの人の男で、彼は、熊のように肩を前のめりにして歩きながら、状況を語った。

「今年に入ってから、赤ん坊の泣き声のようなものが、ここからきこえてくるんです。ずーっと泣き止まず、子どもたちも怖がって、寝ることができなくなっています」

「ああ、それですぐに飛んできたんだよ」ノウアは言った。

「森からも泣き声、子どもたちも泣いて、泣き声だらけで、私達もおかしくなりかけています。だれもいなくても泣き声が聞こえる気がするんですよ！」と熊男。

「それは、断続的に続いているのかね。それとも、夜中なのか？」

ノウアは、鳥のさえずりしか聞こえない森を見渡して言った。

「思いだしては泣き始める、と言う感じですか。昼夜は関係なく」男は言った。「声がでかいんです。すぐやむときもあれば、丸一日中泣いているときもある。子どもたちは、ここ数日、耳に綿をつめて寝ていますよ」

彼は、張り出した枝をくぐった。

「できれば、殺してくださいとありがたい。五、六年くらい前にも同じようなことがあって、そのときは自然消滅したのですが。また今回も来てしまったから、たぶん同じ魔法動物なのではないかと」

「なるほど。なあ、最近、魔法動物と接触したアベドは、いないかね？」

ノウアは、深くくぼんだ目を、守りの人に向けた。

「いないと思います。子どもらは、保育部屋からほとんど出ないし、俺たち守りの人も、この辺にはちっとも来やしませんから。ところで、そのなかが重要なんです？」彼は、軽く訊ねた。

ノウアは、皺だらけの首を、ぼりぼり搔いた。

「魔法動物には魔法動物の因縁、縄張りがある。どのアベドの子を呪いにかけてよ

うとか、やつらには狙いがあるのさ。だから、勝手にこっちが接近すると、知らないうちに別の魔法動物の怒りをかうこともあるのだ」

「ふうむ……。出たり消えたりする生き物に、そんな複雑な関係があるとは思えませんな」

守りの人は、本当に理解できないという風に、くしゃつと笑った。

「こっちとしては、いなくなってもらえるだけで大助かりなので。あとのことは、魔導師様にお任せします」

彼は言った。ノウアは、首を掻いていた手を、だらりと降ろした。

守りの人は、魔導師に礼を示して、去っていった。

風が梢を撫で、葉陰で小動物が動き回る。驚いた鳥が、囀って飛翔し、姿を消す。羽虫が、耳元、目の前をぶんぶん飛び回る。

森の奥へ歩く老魔導師は、ふと、木の又に、大きな緑の豚が座っているのを見つけた。体中に苔を生やし、頭上の葉を、物憂げに食べている。三つに割れた蹄で、ゆっくり枝を降ろし、黒い唇で葉を吸い取る。豚は、桃色の目玉を、片方だけ、くるりと魔導師に向けた。豚の輪郭線は、ゆらゆらと湯気のように定まらなかった。

ぼんやりとした生き物は、それから何匹も現れた。

八つの足を対に持つ赤い毛玉が、足元を通りすぎ、「キチキチ」鳴く、爪の先ほどの鳥が、前を行ったり来たりした。さつさと手で払ったが、鳥は、また「キチキチ」と鳴いて戻ってきた。

木の幹を、するすると上り下りする蝶も見かけた。蝶は、その猿のような顔をノウアに向けると、にったり、青い歯を見せた。

視界の端で、羽虫が舞う。こちらはくつきりと見える。あのごつごつと稜線を描くクヌギも、陽光に煌めく葉も。けれど、その上には、ゆらめく甲虫が止まっていたり、透き通る青白い木が立っていたりするのだった。

ノウアは、先を急いだ。あんまり長居をすると、頭が痛くなってくる。

そう、ノウアの目には、見えないはずの魔法動物が、揺らいで見えてしまっていた。このノウアの特徴は、彼女に耐えがたい苦痛を負わせた。いまでは慣れたものの、幼い頃は、魔法動物と現実の動物の区別が分からず、師たちを混乱させたものだ。

「ノウア、なにを見ている？」

師は言った。「なにを見ている、だれと話をしている？」

ノウアは、空を指さして言った。

「ヤモリだよ。空のヤモリが雲を運んで、太陽を隠すところなんだ」

それが他の魔導師には見えないことを知らされたとき、ノウアは、自分がおかしいと思わなかった。みんながおかしいと思った。

けれど、魔導師たちは、こぞってノウアに本当の世界の在り方を教えた。

「ノウア、世界は、二種の世界が混じり合って広がっている。我々の住む場所は〈現〉、そして、呪いをかけるもの、魔法動物たちが集う場所が〈内世界〉だ」  
ノウアは、このときはじめて知った。〈現〉に住まう健全なアベドたちは、〈現〉のものしか見えないということ。

その教えを叩きこまれたノウアは、どれが〈現〉のもので、どれが〈内世界〉のものかを、徐々に知った。太陽の周りを這っている、巨大なヤモリのような生き物が、〈内世界〉に住んでいる魔法動物〈天守り〉だと知った時には、驚いた。あれも、〈現〉の動物ではなかったのか、と。

〈現〉と〈内世界〉を観察し続けたノウアは、その違いをついに見つけた。輪郭線だ。ぼけているのは、「そういう生きもの」ではなく、〈内世界〉にいるから。

ノウアは、触れて確かめることを何回も行った。しっかり指に接していれば、それは〈現〉のものだ。

くわえて、注意しなければならなかったことがあった。〈内世界〉にいる魔法動物にちよっかいをだされても驚かない、ということだ。なぜなら、周りのアベドたちには、それが見えないからだ。魔導師として自立しはじめたとき、その重要性

は身に染みて分かった。普通でいること、平静でいること。これが、民たちに安堵と信頼を与えるのだと。

ノウアは、頭上を見上げた。

斜めに注がれる陽光の中を、絹のような布切れが浮かんでいる。木の間を縫うように、揺蕩うそれは、魔法動物〈風リシホロアの川〉だった。〈現げん〉の鳥が、その中を滑るように飛んで行く。

どちらの世界も見える唯一の利点と言えば、互いが及ぼす影響を、直に見ることができることだった。さっきの鳥が〈風リシホロアの川〉を使って遠くまで飛んで行けたように、〈現げん〉の生き物と〈内うち世界〉の魔法動物は、アベドの知らないところで共生関係を作っているのだ。

だが、アベドと魔法動物は、それとは少し複雑な関係だ。世界が混じり合っているくせして、互いの間には、不思議な溝がある。畏やいたずらを仕掛け合い、憎み合い、かと思えば、恵みを与えられ尊敬しあい、興味を掻き立てられて数歩近づく。けれど、決して仲良くはならない。双方は、どこかで一線を画している。さて、それは互いに、自尊心によるものなのだろうか。それともやはり、住んでいる世界が違うからだろうか……。

ノウアは、〈風リシホロアの川〉の下を潜り抜けた。ちよっと〈風リシホロアの川〉をくすぐってみる。〈風リシホロアの川〉は驚き、震え、体を分裂させた。小さな渦が生み出される。しば

らくすると、分裂は閉じ、再び流れ出した。

傷つけあいながら、それでも生き続けていく〈現〉と〈内世界〉の生き物たち。

ノウアはそれらを、その特異な二つの目で見つめ続けた。

老木が倒れていた。すっかり、苔やキノコの温床となり、小さな若木も生えて  
いる。

ノウアは、栗鼠が逃走していくのを見ながら、倒木に腰かけ、休息した。

ここには、魔法動物の姿はなかった。いるのは、ずっとくっついてきた、「キ  
チキチ」鳴く鳥だけだ。ノウアは、また手ではたこうとしたが、まんまとかわさ  
れた。

「まったく。あんた、あたしじゃなくて、他のアベドにちよっかいを出した方が  
いいよ。姿が見られないんだから、ぶっ叩かれることもないだろうさ」

鳥は、「キチキチ」鳴きながら、挑発するように、目の前を飛んだ。

「悪い子だね」

そのとき、赤ん坊の泣き声がした。ノウアは、はっとして、耳を澄ました。  
ずいぶん近くだ。赤ん坊は、ぐずるように泣いている。

「あたしは、あいつに用があるんだよ。さいなら」

言いながら、魔導師は、泣き声がする方へ歩き出した。「キチキチ」鳥は追っ  
てこなかった。滑空してきた大きな鳥の影におびえ、警告音を発して飛んでいっ  
た。

それは、梟のストロキントだった。

ノウアは、苔でふかふかする斜面を、ゆっくり下った。すると、ストロキント  
が「ホホウ」と頭上で鳴いた。

「見つけたか？ 思ったより近くだったな。まあ、探し回らなくてよかったが」  
ノウアは、村からそれほど離れていないことに警戒した。問題の魔法動物は、  
アベドに強い関心を持っているのだろうか。でなければ、アベドの居住地の近く  
で居座り、何度も訪れることなどないだろうに。

ストロキントが注視する先に、大木の枝に巻き付く、七色の毛皮があった。ア  
ベド十人分の毛布を巻いてあるかのようだ。鳴き声は、そこから発せられていた。

ノウアは、その毛皮がはつきりと見えることに驚いた。〈現〉にいる。やつは、  
意図的に姿を現しているというのか……？

「〈虹の猫〉や、聞えるか？」

ノウアは、その魔法動物の名前を呼んだ。

虹色の毛皮は、ぐるりと振り返った。大きな紺色の猫顔が、こちらを見下ろす。

猫は、不思議な灰色の目を、好奇で見開いた。



「ダヨ」〈虹の猫〉は、ニャアニャア鳴いた。

「いつからいないんだい」

「イナイ、イナイ。サムーイ、カラ、イナイ」

「冬からいないんだね」

ノウアは、言葉の意味を考えながら言った。ポウを口に放り込む。

「フユ、イナイ。……キラツタ？ ネエ、キラツタ？」

「さあ、嫌いになったかどうかは、そいつに尋ねてみないと。で、どんなやつだったんだい？」

ノウアはもぐもぐしながら、さっきの質問をくりかえした。

〈虹の猫〉は、その太い腕を、鮮やかな菜の花色をした胸にしまい込み、姿勢を正した。

「ドンナヤツダツタ。ウン、ドンナヤツダツタ」〈虹の猫〉は頷いた。

「違うよ。こっちが聞いているんだよ」

「アア、ドンナヤツ。……チイサイ、チイサイダツタ。ウタも、ウタエタ、ダツタ」

「へえ、そうか。いいやつだったんだね」

ノウアは考えながら、口元のかすを落とした。

「……イイヤツダツタ」



実はつまらないことだったりするんだよ」

「デモ、タノシイダツタンダヨー!？」

「うん、そうだね。でも、お別れは、それを忘れろってことじゃないよ。あんたはその子のことを大事に思って、また別の世界を旅すればいいんだ。あんたは羽があるし、万病を直す能があるじゃないか。それを役に立たせることが、あんたの役割じゃないかね。その子も、それを望んでると思うよ」

ノウアは言った。「だれかや、なにかを探してばかりでは、きっと答えは見つからないさ。自分の中を見ないと」

〈虹の猫〉は、一度、灰色の目の窓を閉じた。そして、睨みつけるように目を開くと、体を起こした。

「ダメ？ ココニイテモ？ ドウシテモ？」

「ここにいても、もうその子は来ないだろうよ」ノウアも立ち上がった。

「デモ、キテ、イナクイ、イヤデシヨ？ ダカラ……」

「いいや、もうここには来ないさ」ノウアは、はっきり言った。

〈虹の猫〉は、ぐうんと、翼を広げた。水色の翼は、暗がりには淡く映えた。

「ドコ、イルカ、ホント、シッテルネ？」〈虹の猫〉は、翼を羽ばたかせた。

「知らないよ。知っていたとしても、教えないよ。いいか、あんたは幸運だと思わなきゃならん。魔法動物のみんながみんな、アベドに好かれるわけじゃないん

だから。おとなしく、あんたはあんたの道を生きな」

〈虹の猫〉の水色の翼は、徐々に下がり、体は思案気にくねった。

「ナニモシナイヨ。ワカッタヨ。イイコダカラ、ネエ？」〈虹の猫〉は、にやり笑った。

「なにに誓うかね？」

〈虹の猫〉は、一瞬、尾っぽを巻いて、考えた。

「チ、ニカケルヨ。ソウダネ！」

「あんたの血？ それにかけるのかね。絶対だな？」

ノウアがそう言ったとたん、〈虹の猫〉は枝葉を揺らして飛び上がり、全貌をさらしだした。

によるによくねるその体は、芋虫のように等間隔に盛り上がり、腹部がぼっこり膨らんでいた。色とりどりの柔らかかそうな毛が、風にそよぐ。尾の先は、極彩色の体では目立つ、黒色をしていた。

〈虹の猫〉は、その尾を振りながら叫んだ。

「ジジツ！ ジジツダヨ！」

どうやら、信じてほしい、ということをお願いいらしかった。

「約束だ。見つけに行こうとするんじゃないよ。また迷惑を起こしたら、今度は逃がすことができなくなるんだからね！」ノウアは言った。

〈虹の猫〉は、名残惜しそうにぐるぐる回って飛んだが、やがて意を決して、去っていった。

〈虹の猫〉の輪郭は、みるみるぼやけていった。

ストロキントが、傍に降りたつた。

「あいつを一度も攻撃しないで逃がしたと知ったら、みんな怒るからね。内緒にしておけよ」

ノウアは、〈虹の猫〉が去った方を見上げ、やつがいた場所に目を戻した。

そこで、老魔導師は身を強張らせた。

木の根元でなにか光っている。ぬらぬらと金色に光るそれは、虹の猫の涙だった。

ノウアの頭の中で、なにかがじりじりと動き出した。やがてそれは、大きな音を立てて、立ちはだかりつつあった壁を壊した。

「こいつを使おう！」ノウアは駆け出した「治癒の涙。こいつで、〈見えない死〉を止めてやる！」